

9月30日 日吉地下壕見学報告

9月30日のまんぼ会で慶應義塾日吉キャンパス内にある旧海軍の地下壕を見学しました。

この地下壕は日吉地区に4本あり内3本は慶應義塾日吉キャンパス内にありますが、残り1本は慶應義塾普通部に近い丘に設置されました。

慶應義塾日吉キャンパス内の3本は連合艦隊司令部、軍令部第三部（情報部）東京通信隊、航空本部（航空部隊の元締め）、人事局などの海軍の部局がはいり普通部横は艦政本部（軍艦の設計を担当）が入りました。

ただ普通部横は終戦直前に完成したので使用されませんでした。

現在、見学が可能なのは連合艦隊司令部の壕のみです。

建設されたきっかけは、海軍はそれまで連合艦隊司令部を旗艦に置いていましたが、軍艦が不足してきたこと、通信技術の進歩等により司令部を軍艦におく必要がなくなったこと、海軍も本土決戦に備え地上戦にウエートを移さざるを得なくなったこと、爆撃等の攻撃には地下基地の方が強いことなどの理由が考えられます。

霞ヶ関と横須賀の中間にあり高台で電波受信に適した日吉が選ばれ1944年3月に慶應義塾と貸借契約を結びました。

その後、6月のサイパン陥落直後、8月15日から地下壕の突貫工事を開始したようです。

総延長2.6キロ、壁は厚さ3メートルのコンクリートという大工事でしたが丹那トンネル工事を担当した鉄道工業の協力も得て3ヶ月後の11月には完成したそうです。

掘削したトンネルの表面に型枠をはめ、地上から細い堅穴を掘って上から生コンクリートを流し込んだそうです。

司令部は地下壕だけに置いたわけではなく、通常は慶應義塾寄宿舎を地上司令部に使っておりました。地下壕完成の前9月には連合艦隊司令部が寄宿舎に移ったそうです。

地下壕は地上施設が爆撃等で危険がある時に使用されたようです。通信部隊、暗号解読部隊は地下に常駐しており、そのそばに司令長官室もありました。通信兵には15歳くらいの少年兵が多くいて玉砕や特攻の電文を受信して涙ながらに報告していたという体験者の話もあったようです。

なお、ここは受信専用の通信基地です。電波を出すと司令部の所在が敵に知られるので送信する場合は船橋などの送信基地へ有線で情報を送りそこから前線へ命令を出していたようです。

10月のレイテ沖海戦、比島での神風特攻、3月の硫黄島戦、4月の沖縄戦、大和特攻も

ここから指揮したそうです。大和出撃には第二艦隊司令長官の伊藤整一中将が部下を無駄に死にさせたくないという命令には納得しなかったそうですが、「本土決戦の一億総特攻のさきがけ」になればと草鹿海軍総隊参謀長に説得されたそうです。この作戦で約3,000人の乗組員が戦死したそうです。

民間人を含め第二次大戦の日本人犠牲者は300万人といわれていますがサイパン陥落後から終戦までの約1年でその3分の2の200万人が犠牲となったそうです。サイパン陥落後から和平の動きはありましたが、その決断までには1年かかったようです。

壕の中は地下水が染み出しておりますがこれは中の排水溝に傾斜をつけ自然排水しているそうですし、換気も地形、高低差、偏西風などを考慮し秒速1メートルの風速で自然換気しており、また照明は蛍光灯を使用していたそうです。当時の最新の技術を駆使して作られたことを知りました。

地下壕入口は「まむし谷」という草の生い茂った低地ですがバレーコートが3面あり多くの慶應義塾高校生が体育の授業を受けていました。石段の上の高台には高校のグラウンドがありますが人工芝のようです。

壕を出てから、グラウンド横にあるラジオ放送傍受に使われた瀟洒なチャペル、弥生時代遺跡そばにある茸型の換気用堅穴や地上司令部のあった寄宿舍も見学しました。

寄宿舍は今でも使われておりますので近くにはいけませんでした。

チャペルは米国人でのちに日本に帰化した建築家ウィリアム・ヴォーリズ設計です。

寄宿舍は文化勲章受章者の谷口吉郎氏の設計で当時から個室、水洗トイレ、床暖房、ローマ風呂がある居住性の優れたものだったようです。

茸型換気用堅穴も分厚いコンクリートで作られ爆弾の直撃に耐えられるものだそうです。

当初は7基あったそうですが現存するのは1基のみです。

昭和36年公開の裕次郎主演の映画「あいつと私」は日吉キャンパスでロケしましたが、当時はこの換気用堅穴も2基残っておりこの映画にでてくるようです。

戦争を知る人が少なくなった今、このような遺跡で戦争の実態を将来の世代に伝えたいということでボランティアの方が日吉台地下壕保存の会を作り、見学案内や資料作成などの活動をされています。

なお、写真掲載は許可が必要とのことですので内部の様子に興味のある方は地下壕保存会のサイト

<http://hiyoshidai-chikagou.net/>

を参照願います。

今回の貴重な機会の、準備の労をとられた有田さん、二宮さん、まんぼ会取りまとめの大高さん、荒井さんに感謝いたします。